

咳嗽と筋痙攣

肝硬変に伴うこむらがえりに対する芍薬甘草湯の臨床的有用性

○熊田 卓¹⁾，桐山勢生¹⁾，曾根康博¹⁾，谷川 誠¹⁾，
久永康宏¹⁾，中野 哲¹⁾，森 博美²⁾
大垣市民病院・消化器科¹⁾，同・薬剤部²⁾

【目的】“こむらがえり”（以下MC）とは、いわゆる“腓（こむら）の筋肉がにわかに痙攣を起こすこと（広辞苑）”とされるが通常はMCに代表される「有痛性限局性筋痙攣」と解釈されている。各種変性疾患，代謝疾患などに高率に認められるが，肝硬変（以下LC）では意外と知られていない。今回，われわれはLCに伴うMCの頻度と芍薬甘草湯の有効性を検討した。

【対象および方法】検討1：LCにおけるMCの実態解析（LC318例）。検討2：単施設の MCを伴うLC18例での芍薬甘草湯の有効性の初期検討。検討3：MCを伴うLCの芍薬甘草湯の治療効果の多施設共同研究（無作為比較試験，芍薬甘草湯服用群65例，プラセボ服用群61例，参加23施設，臨床医学15；499－523，1999）。筋痙攣の改善度，副作用の出現頻度を中心として解析した。

【成績】1)検討1：318例中139例43.7%にMCが認められた。部位別には腓が65.3%，手掌15.0%で，発生時刻は夜間が43.2%，夕方が12.8%であった。肝障害度が進行するにつれて増加し，利尿剤服用例でMCの頻度が高かった。2)検討2：18例中MCの完全消失例が12例66.7%，MCのほぼ消失例が5例27.8%と計94.4%の有効率であった。3例16.7%に低カリウム血症を認めた。3)検討3：評価可能であった芍薬甘草湯服用群58例とプラセボ服用群53例で検討した。芍薬甘草湯服用群58例中，4例7.7%が著明改善，31例が改善59.6%，不変が14例26.9%，悪化が3例5.8%で，プラセボ服用群53例中，5例10.4%が著明改善，13例が改善27.1%，不変が22例45.8%，悪化が8例16.7%（判定不能1例）で，芍薬甘草湯服用群で有意には減少した($p=0.011$)。

【考案およびまとめ】LCにおいてMCが生ずる原因としてカルシウムを中心とした電解質異常，ビタミンDの代謝異常，タウリンの低下，hepatic neuropathyの一部分症状である末梢神経障害などが考えられているが定説はない。芍薬甘草湯は，初期臨床試験で効果が期待され，プラセボとの無作為比較試験で有効性が確認された。LCに伴うMCの存在は意外と知られておらず患者はかなり苦痛を伴うため，「証」を考慮に入れなくても使用可能で速効性のある芍薬甘草湯の意義は高いものと考ええる。